

## 八千代市の縄文時代遺跡の分布

朝比奈竹男

### はじめに

印旛沼南岸に位置する八千代市は、かつて千葉郡大和田町・睦村と印旛郡阿蘇村との1町2村の合併によって成立した行政単位である。古代の印旛郡村神鄭が比定される村上地区が所在するところであり、近世においては葛飾郡の一部（現船橋市）と旗本支配が重なる所もあると言う。何れにしてもその郡の中心となる所から離れ、端境をなしていたような地区である。

地形的には他の下総台地に所在する市町村と同様、台地と水田面との比高差が少なく、谷津が複雑に樹枝状に入り込んでいる。船橋市・習志野市・千葉市との間には、小さな分水嶺が存在し、その水系はいずれも印旛沼に流入しており、比較的、北側が緩斜面となり、南側に急斜面が存在する地形となることが多い。

水系が印旛沼に流入するということは、「縄文海進」は銚子河口より入り込んで来たわけであり、現在の地図上ではほとんど八千代市と係わりないように見える印旛沼も、「迅速図」を見ると、新川と神崎川との合流部まで広がっていた様子がうかがえる。

この様な地形的な自然環境のなかで、八千代市にあって縄文時代の遺跡がどの様に分布していたかを考えてみたい。

### 遺跡分布の概要

八千代市においてまとめた形の遺跡分布調査の端緒は、1972年に千葉県立八千代高等学校史学会が市内の遺跡分布調査を実施したことにはじまろう。当時、73ヶ所の遺跡所在を確認し、そのうち縄文時代の遺跡は21ヶ所が報告されている（文1）。その後、「八千代市の歴史」（註1・文2）による報告と続く一方、八千代市教育委員会が1982年度に実施した分布調査においては、264ヶ所の遺跡が確認され、そのうち縄文時代の遺跡は149遺跡となっていた（文3）。82年以降は新たに発掘調査の実施における確認や、地形などを考え合わせた分離などにより遺跡数は増加している。

図1は縄文時代の遺跡分布を掲げたものである（註2）。全時期にわたっているため市域全域に広がっているが、市の南側や所々に空白域が存在してしまっている。市の南側に京成電鉄が走り、1950年代よりの比較的早い段階での宅地造成などにより未調査のまま宅地化され、遺跡所在確認が後手に回った結果であり、建物の下に眠っていると考えられる所もあるが、現行

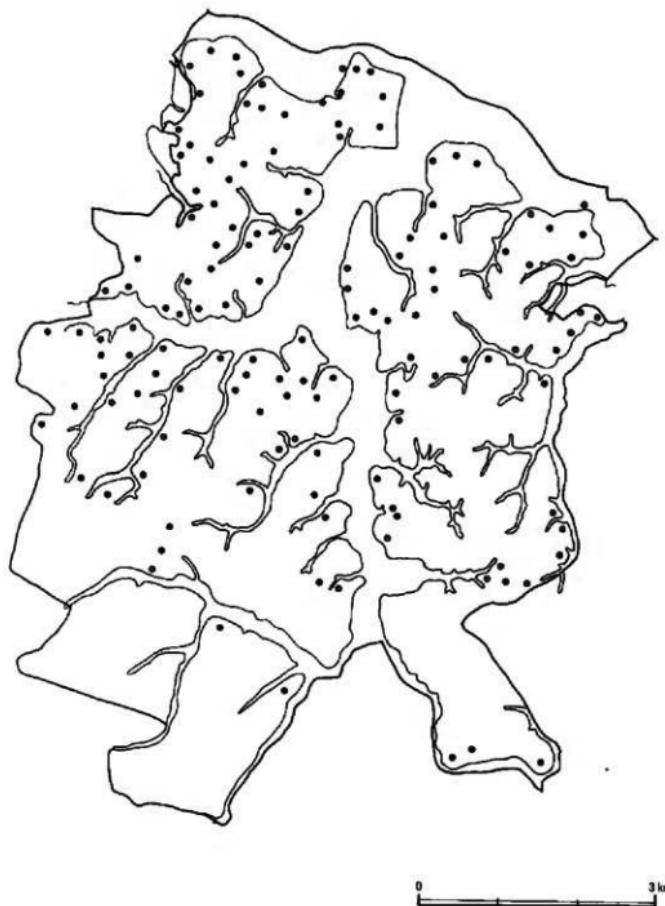


図1 八千代市の縄文時代の遺跡分布（全時期）

では表面観察が困難であり、空白区域が広がっているとも言えよう。

遺跡の所在は八千代市の中央を南北に走る新川と、東西に船橋市より流れる桑納川に流れ込む支谷に面して所在する。そして地区ごとに長期にわたって形成されたであろう遺跡を想定すると（註3）、縄文時代の遺跡が時期によって拡散していくと言えよう。

しかし一方で、村上遺跡群や萱田遺跡群など、弥生時代から平安時代にかけての大規模な集落が調査・報告される八千代市にあって、縄文時代の集落址がなかなか把握できないのが現状である。表面観察上、縄文時代の大規模な集落址が想定される佐山貝塚や神野貝塚は別格としても、現在まで開発行為に伴う緊急調査などで意識的に縄文時代の遺跡だからといって調査を避けたことはなく、包含層の確認はともかくとして、まとまった集落址として捉えられる遺跡が少ないことが、現状では指摘できる状況である。また発掘調査によって竪穴住居址の集落としての検出例も増えているが、それでも稀である地区として捉えられると考える。

次に各時期の概要を記していくこととする。

### 草創期の遺跡

土器出現期の遺跡は確認できていない。しかし土器が共伴する可能性のある石器の出土などを考えると（註4）、土器出現期の確認は将来的な課題として残っていると言えよう。

一方、草創期の遺跡は撫糸文系土器群を主体として、（小破片の土器の出土がほとんどであるが）10遺跡が確認されているにすぎない。立地としては新川の基本的な流域に多く確認されており、市域に散在しているとしか言いようがないのが現状である。

なお、該期の遺構としては、千葉市との境に所在する大諸（高津新田）遺跡で、夏島期の不定方形（台形状に近い）の竪穴住居址が検出されており、これは八千代市の縄文時代を考える上で、新たに資料を提供していると言えよう。

### 早期の遺跡

早期の遺跡は現在23遺跡が確認されているが、その大半が早期後半の茅山系土器群の遺跡である。そして草創期に比して遺跡数は増加するが、なお市域に散在するといった状況である。

遺跡の立地としては各小支谷に面して形成される遺跡が多く、新川・桑納川と言う大きな流域に面してはほとんど形成されていない。

八千代市における該期の遺構としては、やはりファイアーピットを中心とした遺構検出であり、ヲナル山遺跡・ライノ作遺跡・大和田新田芝山遺跡・真木野瓜ヶ作遺跡などで検出している。またこの頃から中期にわたって作られる、陥穴が谷頭付近に形成される遺跡を中心につくられてくる。

一方、精査されていないが下高野新山遺跡ではハイガイの散布が認められ、鶴ヶ島台式土器

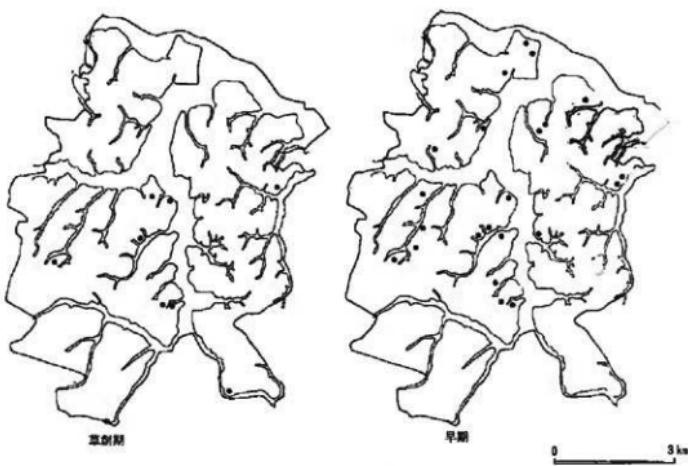


図2 草創期・早期の遺跡分布

や茅山下層式土器が確認されていることから、早期末葉には八千代市内において貝塚形成の端緒となったのではないかと考えられる。

#### 前期の遺跡

前期の遺跡は47遺跡を数え、早期段階より増加が著しくなっている。早期の茅山期より引き継ぎ営まれる遺跡も多いが、土器群として捉えると直接は継続されていないようである。しかし引き続いて形成される遺跡から、同一台地上に散開していくような傾向である。

遺跡の立地としては早期と同様に、直接大きな流域に面して形成されるというよりは、小支谷に面して立地する傾向は引き続いている。時期的には黒浜期が主体を占め、前葉（関山期など）や末葉は少ない。確かに前期の遺跡は早期に比し増加する傾向は示すが、そのほとんどが現在の資料では土器片の、特に黒浜式の確認であり、次に浮島、諸磯期の遺跡が続くことになり、包含層の把握にとどまっている。

この期の遺構としては、大和田新田芝山遺跡・ライノ作遺跡・ライノ作南遺跡・真木野瓜ヶ作遺跡などで、敷軒単位の黒浜期の堅穴住居址が検出され、黒浜期に定着性を強めていく傾向がうかがえる。また大溜入遺跡などでは陥穴が検出されており、定着性の強い遺跡とワークキャンプなどの分離もうかがい知れる時期となっている。

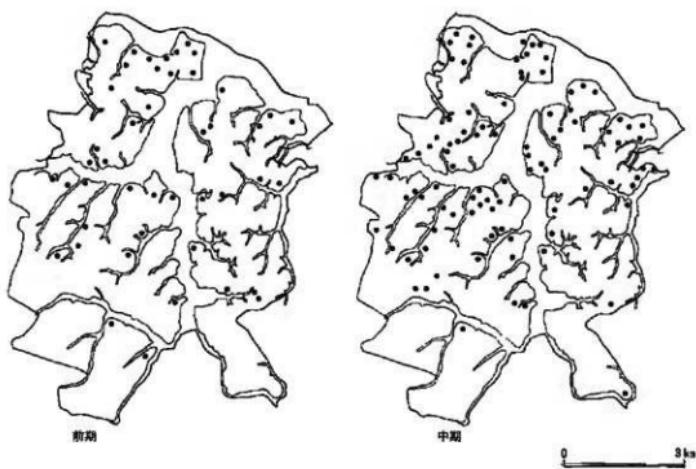


図3 前期・中期の遺跡分布

#### 中期の遺跡

中期の遺跡は 113 遺跡を数え、前期の遺跡数に比べ 2 倍を越える急激な増加となる。分布傾向は市域の全域に広がり、新川・桑納川の大きな流域に直接面する台地上に形成される。小支谷に面して形成された遺跡も、支谷に沿って散開していくようである。

時期的には中期初頭から勝板期にかけての遺跡は少なく、阿玉台期に遺跡数は急増し、加曾利 E 期へ引き継がれることとなる。

なお、佐山貝塚・神野貝塚の形成開始時期がいつ頃となるか未だ不明であるが、加曾利 E 期には開始されたのではないかと考えている。

#### 後期の遺跡

千葉県の東京湾岸では馬蹄形貝塚の形成が最大となる時期ではあるが、八千代市にあっては中期に比し若干だが遺跡数は減少し 103 遺跡となっている（註 5）。遺跡分布は中期と同様に市域の全体に及ぶが、中期に比して立地しない台地がある一方、同一台地上での展開が増えいく様子がうかがえる。

時期的には称名寺期・堀之内期が少なく、加曾利 B および安行 I・II 期が主体である。また前半についてみると、堀之内期より称名寺期の遺跡がやや多く確認されている。

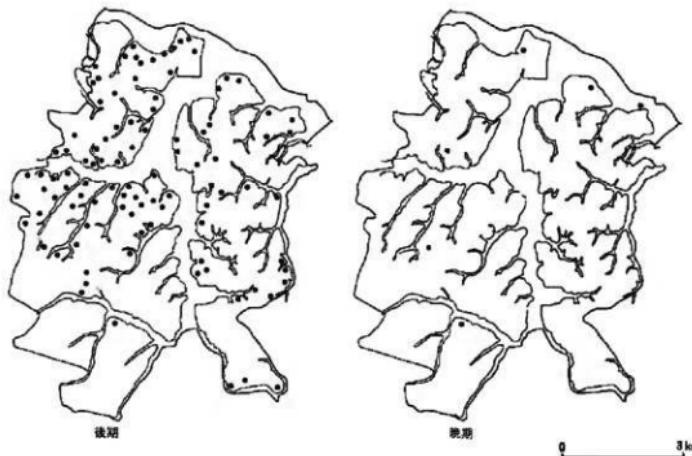


図4 後期・晩期の遺跡分布

該期の中心的な遺跡としては佐山台遺跡やライノ作遺跡で堅穴住居址が検出されている。また佐山貝塚では貝層中より加曾利Bおよび安行II式土器が出土しており、貝塚形成の中心時期として捉えられている。

#### 晩期の遺跡

晩期の遺跡は後期に比べ6遺跡と急減しているが(註6)、このため市域に散見するといった方がよい状況である。該期の遺跡の時期は、前半の安行期が5遺跡であり、後半の千網・荒海期は2遺跡である。該期の明確な遺構は検出されていないが、高津新山遺跡では小範囲に5cm未溝の包含層が確認され、径1m程に粘土を充填した脇に千網II式土器がつぶれた状態で検出されている。高津新山遺跡では千葉段丘面である、低台地上に立地しており、遺跡の下位面への移動がうかがえる。

#### おわりに

今回は分布調査に発掘調査の資料を重ね合わせただけであるが、基本的には分布調査の結果を中心まとめてみただけである。いずれにしても分布調査という表面観察における、概要を示しているにすぎない。

1例として印旛沼の鹿島川水系を中心とする四街道市の分布調査と比較すると、八千代にあっては前期に遺跡の増加が目立つ程度で、後期から中期にかけて遺跡数が若干減少するなど、基本的には各時期の遺跡の出現率は似たような傾向を示しているが（文4）、一方、千葉市などの東京湾岸での後期に遺跡数のピークがくるという傾向とは、時期的な出現率の差は認められる。

なお八千代市の縄文時代の遺跡形成を考える上で、縄文海進も考慮に入れる必要が生じてきた。従来、縄文海進は最大時でも印旛沼の中で、とどまっていたらしいこととされている（文5）。しかし、八千代市内を流れる新川と桑納川との合流部付近のボーリング調査の資料によると、縄文海進によると考えられる海成層が捉えられているという（註7、文6・7）。また旧印旛沼の水面下となる、佐倉市と隣接する保品地区的水田面でのボーリング資料では、洪積層が地表下約20mの地点で確認されていると言う（註8）。このことは海水がさらに奥深く入っていたこととなり、新川の北半の流域は海進最大時には直接鹹水に洗われていたことになる。一方、新川の上流、勝田川に面して調査されている千葉市内野遺跡群のボーリングデータなどでは5m程度で洪積層に至るという（註9・10）。新川流域の沖積地がどの程度早く発達してきたのか、その資料は今後の分析に待たなければならないが、縄文時代の早い段階においては八千代市の北半の新川流域は底の深い谷津であったこととなる。

これを考え合わせると小規模な貝塚といえども隣接する佐倉市に比し、縄文時代の貝塚形成が少ない八千代市にあっては、今後は縄文海進と砂泥底の発達との係わりとも合わせて、貝塚だけではなく遺跡分布を捉えていかなければならないとも考えている。

（八千代市歴史民俗資料館）

註1 1972年の分布調査を基に、その後所在を確認された遺跡を含めて88遺跡が「八千代市の歴史」（通史）の分布地図に掲載されている。

註2 1982年度の分布調査を基に、その後発掘調査などで得られた資料を加えて作成しているが、収集しきれなかったところもあり、これより若干の増加はあると考えている。

註3 例えば八千代市においては佐山貝塚や神野貝塚など、各台地にあって長期間形成され、中心となっていったであろうと考えられる遺跡である。

註4 植原正氏のご教示によれば、二重堀遺跡では土器の出土は確認できなかったが、土器に伴うと考えられるポイントが出土している。

註5 中期と比し遺跡数の差が僅かであるため、当然ながら今後の発掘調査の結果により、増減はあると考えている。しかし現状の資料では遺跡数が中期に最大となる傾向は、同じ印旛沼水系の四街道市などでもうかがえる。

註6 晩期に遺跡数が激減する傾向は弥生時代中期にまで引き継がれ、弥生時代中期の八千代

市内の遺跡確認は2遺跡と更に減少する。2遺跡のうち一つはやや小規模な環濠集落である田原窪遺跡であり、いずれも宮ノ台期の遺跡である。

註7 稲田晃氏ご教示による。

註8 稲田晃氏ご教示による。

註9 田中英世氏ご教示による。千葉市内野遺跡群のボーリング資料によると、5～6m程度で洪積層に到達するという。

註10 稲田晃氏ご教示による。千葉市内野遺跡群の下流にあたる八千代市勝田地区の勝田川に隣接した地点でのボーリング資料によると、5m程度で洪積層に到達するという。

#### ＜参考文献＞

文1 中山 守 外「八千代市遺跡分布調査概要」史学報1 1972年 千葉県立八千代高等学校史学会

\*中山 守 外「八千代市遺跡分布調査概要」1972年 八千代市教育委員会刊は、同じ内容の報告書である。

文2 八千代市史編さん委員会「八千代市の歴史」1978年 八千代市

文3 八千代市教育委員会「八千代の遺跡－千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－」1983年

文4 四街道市教育委員会「千葉県四街道市埋蔵文化財分布地図」1982年

文5 江坂輝弘「海岸線の進退からみた日本の新石器時代」科学朝日14-3 1954年

文6 八千代市史編さん委員会編「八千代市の歴史 資料編 自然1」1985年 八千代市

文7 稲田 晃「八千代市新川低地の花粉分析」八千代の自然を調べる会花粉グループ 1994年 野尻湖花粉グループ集会レジュメ

\*八千代市内の遺跡調査報告書は（財）千葉県文化財センターを中心に、八千代市教育委員会などでも刊行されているが、今回その一覧は割愛させていただいた。

なお、八千代市史編さん委員会編「八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世」1989年 八千代市刊 に各遺跡の資料概要が掲載されているので参照願いたい。